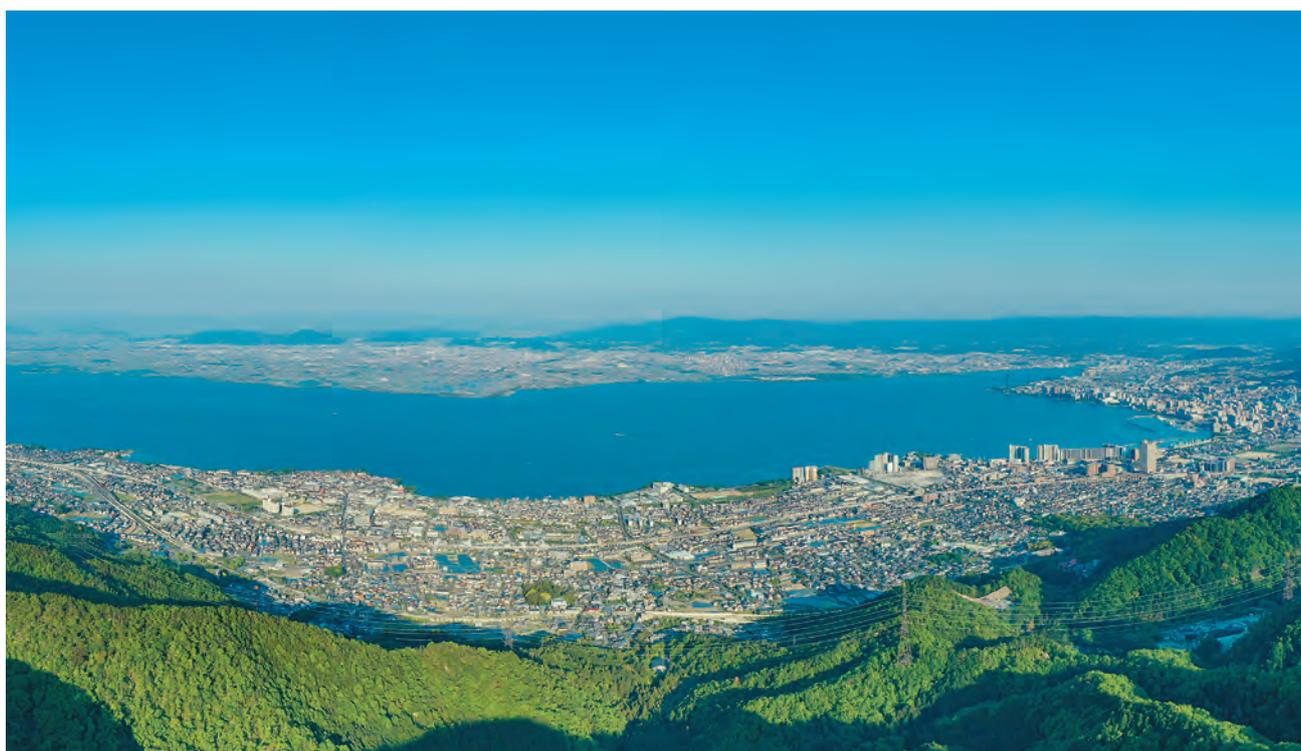


CONTENTS

1. 五感とセンス，そして年次大会「三方よし！」
2. 令和6年度放射線安全取扱部会年次大会
(第65回放射線管理研修会) 概要報告



比叡山から眺めた琵琶湖



公益社団法人

日本アイソトープ協会
Japan Radioisotope Association

発行日 2025年9月10日
発行 公益社団法人 日本アイソトープ協会
(連絡先) 学術振興部 学術課 03-5395-8081

五感とセンス，そして年次大会「三方よし！」



近畿大学原子力研究所

稲垣昌代

このたび、令和7年度放射線安全取扱部会年次大会の実行委員長を務めさせていただくこととなりました。私にとっては責任の大きい役目ではありますが、実行委員の皆さまと準備を進めており、大会の成功に向けて取り組んでおります。このような誌面にてご挨拶の機会をいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。

今回の年次大会のメインテーマは「放射線の三方よし！～管理・利用・世間を主任者が紡ぐ～」です。これは、近江商人の経営哲学「三方よし～売り手よし・買い手よし・世間よし～」をヒントに、放射線の分野においても、管理者・利用者・世間の三者が調和することの大切さを表現いたしました。

このテーマに込めた思いに加えて、私自身と放射線との出会いや、本学の放射線施設の特徴についてお話しさせていただければと思います。

五感とセンス

今から約30年前、エネルギーや環境問題に特に関心があったわけでもなく、原子力や放射線に関してもほとんど知ることがなかったのに、大学生時代に選んだ研究室が放射化学薬品学研究室だったことがきっかけで、なぜか職業として近畿大学原子力研究所の放射線管理業務を選択しました。この研究所に技術職員として就職し、初めて極低出力の原子炉と出会いました。原子炉とさりげなく接する先生方のそばで、ほとんど知識のない私は新鮮さと戸惑いを感じながら放射線と向き合い、気が付けばいつのまにか30年以上が経過していました。来年11月に近畿大学原子炉が臨界65周年を迎えるにあたり、その半分の時間を共に歩んできたのかと思うと、なんだか妙に感慨深く感じています。

私の技術職員としてのメインの仕事場は、熱出力1Wの教育研究用の近畿大学原子炉です。もちろん発電するしくみは持っていません。商用発電炉の熱出力数十億Wと比較し、規模の違いは歴然です。しかし、1Wの原子炉であっても、私にとっては常に五感を研ぎすまし、それをどう判断するかのセンスを磨かなければならない現場であります。原子炉の管理には五感がとても重要で、施設内の空間を流れる音、肌感、におい、姿や動きが、いつもと違う場合はすばやくキャッチしなければなりません。たとえば、原子炉運転中のわずかな音の違い、排風機の振動の変化、サーベイメータの針やデジタル表示の微妙な振れ幅など、多種多様なメッセージがあります。それらメッセージを捉えるセンスは、机上だけでは習得できず、その場に毎日通わないとわからない息づかいでもあります。おそらく、どの現場にもこの五感とセンスをフルに活用している現場担当者がいるはずです。現場に携わる者のセンスを磨くことは重要で、実際に触れて実感することの大切さを常に感じています。そして、この五感とセンスは原子炉を管理するだけにとどまらず、放射線を管理する場面でもたびたび重要であると学びました。

近大原子炉とは別の放射線施設の存在

近畿大学原子力研究所は、その名の通り原子炉が目玉となっています。情報公開や安全性に対する不安など社会的に与える影響が大きく、研究・教育・人材育成の面で中心的な役割を果たしています。一方、RI規制法により許可を受けている放射線施設も敷地内の原子炉とは別棟に所有しています。現在、私を含めて3名の主任者を選任し、原子炉の管理と両立しながら運用しています。現実的には、原子炉

の管理に手を取られますので、放射線施設はなかなか手厚く対応できていないのが実情です。しかし、当研究所の放射線施設には自信を持って紹介できる点がたくさんあります。以下にご紹介いたします。

1. 管理

まず、当研究所の放射線施設を管理する立場としては、原子炉で培われた放射線管理の手法を放射線施設の運用にも活かすことができる利点があります。原子炉等規制法とRI規制法ではそれぞれ規制の仕組みが異なりますが、原子炉の方が、より厳格で緻密な規制を受けています。たとえば、RI規制法で数年前に施行された放射線測定器の信頼性確保についても、原子炉等規制法では以前より品質保証の観点から制度化されていたため、RI規制法が施行された際も、そのノウハウを即座に活用できた、あるいはすでに運用していたために慌てることはありませんでした。このことは、原子炉と放射線施設の両方の管理に携わる主任者としての大きな強みのひとつではないかと感じています。

2. 利用

次に、利用者の立場として、当研究所の放射線施設は、許可使用核種を約250核種とっていますので、あらゆるユーザーの希望核種に 대응することが出来ます。特に近年、核医学治療として用いられる α 核種も許可を受けているため、最先端の研究が可能です。実際、医療応用で注目される短寿命 α 核種の ^{211}At をはじめ、 ^{223}Ra 、 ^{225}Ac 、さらに β 核種の ^{177}Lu などを用いた研究も盛んにおこなわれています。もしこれらの核種の使用許可を今から申請するとすれば、かなり手間がかかることが予想され、研究の進行に影響を及ぼすことが懸念されます。しかしながら、本学の放射線施設では、いとも簡単に行えます。このような施設を整えてくださった近畿大学の先人の先見の明にはあらためて驚かされます。そして、今こうして活用できるありがたさを日々実感しています。

3. 世間

近年、いくつかの大学では放射線施設を廃止する動きが加速しているように感じています。本学でも、かつては学部ごとに許可を受けていた他キャンパスの放射線施設が次々と廃止され、現在ではRI実験

が行えるのは、東大阪キャンパスにある当研究所の放射線施設のみとなりました。

こうした状況を受けて、当研究所では数年前より他キャンパスのユーザーも受け入れを開始しており、本学唯一の放射線施設を安全に運用することの重要性と、その責任の重さを日々感じています。

この職に就いた当初、最初に学んだのがRI規制法第1条「公共の安全を確保すること」(当時は放射線障害防止法)でした。その条文の重みを通して、この仕事が世間に深く繋がる責任ある業務であることを改めて実感しています。

こうした本学の現状を振り返ると、まさに私なりの「近畿大学の放射線の三方よし!~管理・利用・世間を主任者が紡ぐ~」がここにあるのではないかと感じています。

原子炉や放射線施設に対する規制について

次に述べたいのは規制についての思いです。原子炉等規制法による規制は、この十数年で大きく変化を遂げています。かつては、規制当局である原子力規制庁(当時は文部科学省や科学技術庁が所管)が検査項目や基準を策定し、その監督のもとで事業者が規定の検査を受け、合格するという受動的な形式が主でした。しかし近年では、「事業者自身が考え、事業者が責任を持つ」という考え方に基づく規制へと移行しつつあります。検査の名称も、「定期検査」から「定期事業者検査」へ、「使用前検査」は「使用前事業者検査」へと改称され、「事業者」という言葉が明確に加えられました。この変化は、事業者が受動的に検査を受け、指摘事項に対応する流れから脱却し、より能動的に自らの責任で管理・改善を進めることを意味していると考えています。

現在はフリーアクセス制による日常的な検査が導入され、事業者自らが品質マネジメント体制を整え、その運用に通じた継続的な改善活動が求められています。RI規制においても、定期検査や施設検査を事業者自身が策定し、事業者責任のもとに実施する時代がやがて到来するのではと想像しています。

実際、RI規制法でも、RI事業者に対して品質保証体制の確立が求められ、測定の信頼性確保がより一層重要視されるようになりました。さらにRIセキュリティに関わる規制も導入されました。核物質

に関しては、以前から物理的防護に関する厳格な規制が課せられてきましたが、近年ではサイバーセキュリティ対策の重要性も高まっています。RIセキュリティについても、今後は同様に、物理的防護と防護機密情報の両面でのセキュリティ確保が強く求められる流れになると考えています。

放射線安全取扱部会との出会い

さて、ここまでさまざまな思いを述べさせていただきましたが、ここからは実務担当者、そして主任者として、放射線安全取扱部会とのかかわりについて少し触れさせていただきます。

本部会との出会いは、平成5年主任者年次大会(当時は放射線取扱主任者部会)に参加したことがきっかけでした。翌平成6年の大阪大会ではサポーターとして企画・運営に関わり、当時活動されていた「草の根ネットワーク」という分科会の熱量に圧倒されたことを、今でもよく覚えています。その後、近畿支部委員や京都大会の実行委員などを務め、現在は第33期近畿支部長を拝命し、今日に至っております。

年次大会のお誘い

今大会のメインテーマは「放射線の三方よし!～管理・利用・世間を主任者が紡ぐ～」です。今回の開催地「大津」は交通の要衝地として発展してきた歴史があり、江戸時代から明治時代にかけて日本各地で活躍した近江商人が有名な土地柄でもあります。その近江商人の経営哲学のひとつ「三方よし」の概念を参考に、放射線関連の分野に応用する企画といたしました。大津に集結した全国の部会員の皆さまに活発な意見交換の場を提供できればと思います。

本大会では、以下の構成にて講演およびシンポジウムを実施いたします。

・特別講演Ⅰ

原子力規制庁より「最近の放射線安全規制の動向」についてご講演いただきます。

・特別講演Ⅱ (医療)

「核医学治療の最新動向と現場状況」をテーマに、大阪大学の先生より、臨床研究の最前線と現場での安全管理についてご講演いただきます。

・特別講演Ⅲ (測定)

「原子力災害への対応と自治体における取り組み」

をテーマに、日本原子力研究開発機構および滋賀県のご担当者より、災害時の対応と地域連携についてご講演いただきます。

・シンポジウムⅠ (照射)

「大線量照射事業の現状と将来予測」をテーマに、企業および大学の専門家より、照射施設の運営や規制対応に関する実践的な知見をご紹介します。

・シンポジウムⅡ (企画専門委員会企画)

「琵琶湖をめぐる安全サイクルー放射線管理の365日ー」をテーマに、大規模・中規模施設の主任者による日常管理の工夫と課題をご共有いただきます。

さらに、今大会の目玉の一つとしまして、交流会を大会1日目の夜、びわ湖クルージング船にて開催します。湖上や海上での交流会は、おそらく年次大会初めての試みだと思います。普段とは違う空間で、参加者の方々が和やかな雰囲気の中で交流を深める機会を設けたいとの強い思いがあり企画いたしました。びわ湖の夜を五感で感じながら、ゆったりとした時間をお楽しみください。

「三方よし」の精神が息づく近江の地、大津・びわ湖畔にて、放射線をめぐる管理・利用・世間との調和について皆さまと共に考えるひとときとなれば幸いです。実行委員会一同、皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

おわりに

以上、僭越ながら私の思いを述べさせていただきました。年次大会の開催に向けて、約2年前から近畿支部で準備を始め、現在は実行委員一同が日々準備を進めています。企画・運営に携わっていただいているすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。至らぬ点も多い実行委員長ではありますが、皆さまのお力添えにより、着実に前へと進むことができます。

実行委員一同、「三方よし!」の精神で声を掛け合い、年次大会を盛り上げていきますので、ぜひご参加いただけますと幸いです。

それでは、びわ湖畔でお会いできることを楽しみにしております!



令和6年度放射線安全取扱部会年次大会 (第65回放射線管理研修会) 概要報告

令和6年度放射線安全取扱部会年次大会実行委員会

はじめに

令和6年度放射線安全取扱部会年次大会(第65回放射線管理研修会)は令和6年10月17、18日の2日間、長野県松本市のあがたの森文化会館(松本市県3丁目1番1号)を会場として開催いたしました。天候にも恵まれ初秋の信州らしい気持ちの良い空気のなか、計276名(招待者含む)の方にご参加いただきました。皆様に感謝申し上げます。

本年度の大会テーマは「コロナ禍を乗り越え逞しく～大正ロマン薫る講堂で是からを考える～」としました。コロナ禍を経験し様々な形式を利用したコミュニケーションの取り方や管理方法が構築され、省力化、効率化が図られて困難を乗り越えてまいりました。会場のあがたの森にあるヒマラヤスギのように、どんな環境にあっても“逞しく”，明治末期から大正時代前期にかけての代表的作例と言われる旧松本高等学校のあがたの森文化会館で是からを考えようという思いをこのテーマに込めました。プログラムは知識・技術の伝承，人財育成，安全文化醸成，そして多様性という観点から過去を学び，現在の課題から未来を考えるような視点で編成しました。プログラムの詳細は各報告をご覧ください。

本大会では3点の新たな試みを行いました。1点目は，ポスター会場と機器展示会場を混在し，すべての機器展示ブースを回れば観光名所の割引券をプレゼントするスタンプラリーを実施しました。協賛企業にはスタンプラリー達成者の情報を提供(参加者には事前に了解済み)しました。2点目は，要旨集をホームページからダウンロードするためポスター・機器展示会場にWi-Fiを設置しました。3点目は参加者が選ぶ推しのポスター賞「推しP賞」を全員参加型の企画として設けました。

そして5年ぶりとなる交流会を実施し，定員となる150名のご参加をいただきました。久しぶりに顔を合わせた会員や新たに加わった会員の方にも参加

いただき盛況となりました。本大会は総じて笑顔の大会であったと思います。会場のいたるところで笑顔を見ることができました。様々な意見交換や対話ができ，交流の輪が広がる姿は対面ならではの改めて感じました。

今大会の会場のあがたの森文化会館は国指定重要文化財であり，古き良き時代を偲ばせる趣のある学舎で，参加された多くの方にポジティブなご意見を



写真1 放射線安全取扱部会総会



写真2 令和6年度部会表彰受賞者

左より阿部利明氏，小野孝二氏，加藤真介氏，渡部浩司部会長，永元啓介氏，小池裕也氏

主任者コーナー

いただきました。その反面、会場が狭かったり、大会会場とポスター・機器展示会場が離れていたりのご参加の皆様にはご不便をおかけしたと思います。また、開催地までの移動が大変だという声も多く寄せられました。首都圏や他の場所の近代的な会場も検討しましたが、参加者数や協賛企業数の想定と会場使用料が高騰している等の経費との収支バランスを考慮すると、いずれも候補とならず、最終的に会場費用が抑えられ参加する皆さんの参加費用負担が大きくなならない松本市に決定いたしました。今後はどのようにして参加者を増やすか、協賛や協力を得るためにはどうすればよいか等、開催地の特色を活かした計画や様々な工夫を考える必要があると個人的に思っております。

本大会は、かかわったすべての方が自発的に動き、汗だくになってそれぞれの思いを注いでくださったおかげで無事に終了しました。実行委員はじめ賛助委員の皆様、駆けつけていただき準備を手伝っていただいたボランティアの皆様、機器展示協賛の企業の皆様、松本観光コンベンション協会の皆様の支援によって本大会が成立しましたことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

(佐々木博之 (実行委員長))

特別講演 I

「最近の放射線規制の動向（放射性同位元素等規制法関連）」

(原子力規制委員会原子力規制庁 宮脇豊氏、田村康明氏)

今回は安全管理調査官の宮脇氏、審査係の田村氏をお招きして、最近の放射線規制の動向についてご講演いただいた(写真3)。田村氏からは令和6年4月1日付で放射性同位元素等規制法オンライン手続サイトにて申請・届出の電子申請が可能になったことが紹介され、サイト利用方法の説明があった。またデジタル庁の国家資格受験申込等において放射線取扱主任者試験もマイナポータルを活用する検討を行っていることが紹介された。事業所によって申請・届出の頻度が異なるため、今すぐ使用予定はなくてもDX化されたことのメリットやGビズID取得状況等は確認したほうがよいと思われる。宮脇氏からは改正された未承認放射性医薬品等に係る規制の合理化、測定信頼性確保について、また立入検



写真3 特別講演 I (左より田村康明氏, 宮脇豊氏)

査状況、事故・トラブル事例、許可届出使用者等の責務、ガイド類の整備についてご講演いただいた。ガイド類の整備については発表資料とは別に放射線予防規定についての雑感(日々の規制事務での気付き事項等)を参考資料として配布いただいた。令和5年10月に施行された測定の信頼性確保の法令上の義務付けによって、これ以降に予防規程の変更の届出がなされたことを受け、規定しなければいけない事項、法令等を遵守するための内容、実行可能な内容であることの確認をしたところ、新たな規制内容を適切に予防規程に取り込んで規定しようという意気込みや、苦心等が見られた。そうした確認において気付き事項があったということで、所見、事例をご紹介いただいた。これは、あくまで規制事務担当官からの雑感を記されたものであるが、規制についての理解、関心を深める一助になればという思いを感じた。当然ながら予防規程に定めた内容をどう理解し、解釈して運用するかは許可届出使用者が判断して対応すべきことである。今回提供された貴重な資料は再度事業所の予防規程と共にご確認いただきたい。宮脇氏、田村氏は今年度からご講演対応をされており、初めてお会いした方もいらっしゃると思うが、ご認識いただくよい機会だったのではないだろうか。時間いっぱいまで思いのこもったご講演をいただいた宮脇氏、田村氏に感謝申し上げます。

(佐々木博之)

特別講演Ⅱ**「放射線被ばくと遺伝影響」****(放射線影響研究所 中村典氏)**

初日の特別講演Ⅱでは、ヒトでは放射線の遺伝的影響が見られない理由について、以下の3つの視点からご講演いただいた(写真4)。**①**マウス未熟卵子では突然変異が誘発されない、**②**マウス特定遺伝子座実験(SLT)で使われた遺伝子はゲノムの代表ではない、**③**ヒトはマウスと違う。放射線防護の見地からは、「マウスでは影響があるがヒトでは影響はない」と言い切れるだけの知識はないので、現在のところヒトにおける遺伝的リスクは存在するものとして扱われている、ということに対する中村先生の興味深いご講演であった。

おわりに、「福島で何を伝えたらよかったのか?」という振り返りで、福島原発事故の際、当時の高校生やそれ以下であった女性が被ばく(もしあったとして)による突然変異を生じた可能性はないことから女子高生が将来を不安に思うことはない。また男性の場合は、小児がんの放射線治療により生殖腺に数グレイ以上の放射線を被ばくした人でも次世代に異常は生じていないという事実は理解の助けになる、という括りは非常に明快で説得力があった。

(小野孝二)

特別公演Ⅲ**「診療放射線技師の現状と社会貢献」****(日本診療放射線技師会 上田克彦氏)**

初日に行われた特別公演Ⅲでは、放射線を冠する我が国唯一の医療従事者である診療放射線技師に関してのご講演をいただいた(写真5)。上田先生が

会長を務められている日本診療放射線技師会は、診療放射線技師全体の資質向上等に取り組まれている厚生労働省所管の公益法人で、全国の診療放射線技師の多くが所属されている。当会では東日本大震災時の原発事故では放射線汚染や被ばく量評価のため、物的、人的な支援を行ったこと等が紹介された。

診療放射線技師の業務内容は、以前から比較すると格段に広くそして深くなっており、X線を使った撮影業務を中心に、放射性同位元素を使った検査や高エネルギー放射線を利用した治療、MRIや超音波検査等非放射線系医用画像診断に関する業務や関連機器管理業務等があり、多くの診療放射線技師が活躍されていることが説明された。また、最近では医師のタスクシフト、タスクシェアの動きが活発で、これまでは医師もしくは看護師が行っていた業務、例えば造影剤投与に伴う静脈への穿刺や撮影後の抜針、下部消化管へのカテーテル挿入等は診療放射線技師も行うことができるようになり、一層業務内容が拡大している。もちろん業務の拡充により人材の確保も重要である。診療放射線技師の養成は大学、専門学校を中心に行われ、年間約3,000名の方が資格を取得し、毎年数百名の純増となっている。一方で需給バランスは2040年頃を境に供給過多となる予想もあり、将来を見越し、「JART Vision 2040」では、診療放射線技師職の継続と発展が検討されているとのことであった。

我が国の場合、年間の平均被ばく量は自然放射線で2 mSv程度、診断による医療被ばくが3 mSv程度と報告されている。また、治療での被ばく量はケースによって大きく異なるが、治療期間内の合計で数十 Gy程度にもなる。がん治療において放射線治療



写真4 特別講演Ⅱ(中村典氏)



写真5 特別講演Ⅲ(上田克彦氏)

主任者コーナー

は最も重要な療法の1つであり、がん患者数は年々増加していることから集団実効線量は高くなっていくことが予測される。核医学検査や高エネルギー放射線による治療を行う場合、医療法による規制に加え、放射性同位元素等規制法に沿った管理が必要で、当然放射線取扱主任者の選任が必須である。医療機関での放射線管理は診療放射線技師が担うことも多く、実際に放射線取扱主任者として選任される診療放射線技師も多い。

放射線安全取扱部会としては今後も日本診療放射線技師会からご協力をいただきつつ、放射線安全管理実務者が一層研鑽し、安全に放射線の恩恵を享受できる環境を目指すことが重要であると改めて考えさせられた講演であった。

(関健介)

シンポジウムⅠ

「東日本大震災直後からの復興支援の振り返りからの学びと教訓」

2011年の東日本大震災とそれに伴う原子力災害から本誌が発行される頃には14年が過ぎ、当時主任者としてこの未曾有の災害に対応にあたった方々も徐々に現役を退いてきていることから、このような重大なインシデントに直面した際の心構えやノウハウ等を直接うかがう機会も少なくなってきたのではないだろうか。

大会2日目のシンポジウムⅠでは長崎大学の松田尚樹先生と福島県立医科大学/福島国際研究教育機構の山下俊一先生をお迎えしご講演いただいた。

最初に「放射線取扱主任者と原子力災害の接点～初期対応から原子力災害時対策へ」と題して松田先生にご講演いただいた(写真6)。福島第一原子力発電所事故(以後、福島原発事故)後の福島医科大学病院における、高線量被ばく者受入れ準備、幼児の甲状腺モニタリング、搬送者の線量評価等の対応について臨場感のある内容であった。また、非日常的な高線量バックグラウンドの現場であるという点にさえ慣れてしまえば、放射線管理区域でのいつもの仕事の延長線という意識で対応したという内容は、日ごろの主任者業務を通じて身に着けたスキルは冷静に対処できれば重大事故においても役立つものになりうるという示唆に富んだものであった。

続いて「福島原発事故対応の経験と教訓」と題し



写真6 シンポジウムⅠ (松田尚樹氏)



写真7 シンポジウムⅠ (山下俊一氏)

て山下先生からご講演いただいた(写真7)。長崎原爆被爆者への対応経験とチヨルノーベリ原発事故周辺への医療協力、そして国際機関での緊急被ばく医療や放射線防護の取組み経験をもとに、放射線に関する国民的コンセンサスの醸成がいかに重要か、また、福島原発事故後1週間目から福島県に入り混乱と混迷に対峙したご自身の経験から、福島復興に向けた展望と原子力災害医療の課題についてご紹介いただいた。

両先生の講演を通じて当時の臨場感ある対応や事故対応に臨む心構えや日ごろの業務を通じたスキルアップの重要性等については、当時を経験されたベテラン主任者はもとより、当時はまだ学生で最近選任されたばかりの若手主任者にとっても、非常にためになる講演であったと思う。

(秋山和彦)

シンポジウムⅡ

「RI施設の未来に向けて～施設維持のための縮小と連携～」

大会2日目のシンポジウムⅡでは、企画専門委員会によるシンポジウム企画として、RI施設の未来をテーマに3名の先生方にご講演をお願いした。RI利用者の減少に伴い、RI施設の廃止や縮小を検討される事業所が増えるなかで、廃止や縮小を経験された先生方の実体験やノウハウをお話しいただくと共に、RI施設を維持して発展させていく、未来のポジティブな展望についてもお話しいただいた。

最初の演者である北海道大学の安原優子先生のご講演「北大農学研究院RI施設を廃止して」では、安原先生が経験されたRI施設廃止のリアルな体験談をお話しいただいた（写真8）。2001年以降の利用者減少や、主任者免許所有者の定年、液体シンチレーションカウンタの故障等により廃止となった経緯が紹介された他、廃止に要した予算額の開示や、個人の記録の名寄せや移管についての話題もあり、参加者の興味を強く惹きつけるご講演であった。「室内写真をもっと撮っておけば良かった」という反省点は、廃止の実体験からくる貴重な助言となった。

2番目の演者である愛媛大学の岩崎智之先生のご講演「愛媛大学医学部RI施設の改修に伴う縮小の実際」では、10年前に行われたRI施設改修についてお話しいただいた（写真9）。排気設備の故障を機に、一時は廃止も検討されるなか、80名程度の登録者の存在や、医学生へのRI実習の重要性に加えて、分子イメージング研究の将来構想、全学のRI関係者の組織化による教育への貢献、RI施設の活用等をアピールすることにより、発展的な縮小の改修が行われた事例が紹介された。改修の具体的なスケジュールは大変参考になった他、ピンチをチャンスに変えた改修事例は、RI施設の未来を考えるうえで大変魅力的な話題であった。

3番目の演者である福島県立医科大学の鷲山幸信先生のご講演「集団脳として機能する日本アスタチンコミュニティ」では、日本における ^{211}At を活用した研究が世界をリードしている現状が紹介された（写真10）。 α 核種である ^{211}At は半減期が7時間程度であり、核医学治療に活用しやすく、またデリバリーも可能であることから、サプライチェーンの構築や、拠点同士の協力が行われている。情報や研究成果等



写真8 シンポジウムⅡ（安原優子氏）



写真9 シンポジウムⅡ（岩崎智之氏）



写真10 シンポジウムⅡ（鷲山幸信氏）

を共有して広げていくことで、小さい集団から大きな集団へと発展した日本アスタチンコミュニティの実例を通じて、多くの人が集うコミュニティの形成こそが、科学技術を発展させ、次の世代に継承できるのだという、未来へのメッセージをいただいた。

ご講演後の総合討論も大変盛り上がり、RI施設の廃止や縮小に関する具体的な話題や、後継者の育成、若手のマネジメントに関する助言等も交わされた。

3名の先生方のご講演を通じて、RI施設の廃止や縮小の具体的な事例を知ると共に、コミュニティ形

主任者コーナー

成の重要性を学ばせていただいた。放射線安全取扱部会もまた、良好なコミュニティの1つであることから、部会員間の交流や情報の共有等、部会活動の活性化が、RI施設のポジティブな未来につながるものと期待したい。

(山本由美)

ポスター発表

ポスター発表は1日目の13～15時に本館2-5、2-6、2-7会議室で行われた。メイン会場の講堂とは別の建屋の2階であり、講堂から離れていたため参加者が集まるのかを心配していたが杞憂であった。10月の中旬にも関わらず、扇風機や冷房機を使わなければいけないほど参加者が集まり、ポスターの前で活発な質疑応答や意見交換が交わされていた(写真11)。ポスター発表の演題は「施設管理・運用・リスク」が14件、「教育訓練・啓蒙活動」が7件、「分科会・委員会・支部活動」が5件、「環境放射能・その他」が1件の全27件であった。

今回、通常のポスター発表とは別に、関東支部によるお題提案型ポスター発表も同時に行った。テーマを「私の施設の規則第20条に係る測定の信頼性確保の様式」として、ポスターの書式を統一し施設間での比較がしやすいようにした。発表数は12件で、施行開始から約1年が経ち、各施設の運用状況が初めて記録された内容だと思われる。自身も管理者の立場として自施設の書式を思い浮かべて比較をしながら見て回り大変勉強になった。

ポスター発表の最優秀賞、優秀賞及び今大会の企画である参加者がモバイルデバイスで投票して選ぶポスター賞として推しP賞を選出した。各賞の発表はコロナ禍後初めて実施された交流会で行った(写真12)。

最優秀賞

「大学卒業生組織と連携した放射線教育と人材育成」
関野梨名(明治大学)

優秀賞

「目視で確認できない排水設備の定期的な点検方法についての検討」北実氏(鳥取大学)

「能動的学習による中高生への新規放射線教育について」藤野秀樹(兵庫医科大学)

推しP賞

「明治大学放射化学研究室における産学連携放射線



写真11 ポスター発表会場の様子



写真12 ポスター賞受賞者(左より佐々木博之実行委員長、関野梨名氏、高橋亘氏、北実氏)

教育の歩み」高橋亘(明治大学)

(藤井智彦)

相談コーナー

今大会も前回と同様に、事前申込制で受付を行った。年次大会ホームページ開設時から事前申込制である旨をアナウンスし、申込受付の際に所属と相談内容等をうかがい、実行委員が適切な相談員の選出と相談時間の調整を行った。この方法は、相談員があらかじめ相談内容を確認し、回答を準備することができるため充実した質疑が行える方法であると思われる。また、今回はポスター発表時間中に実施し、相談時間を1件当たり30分確保した。

今大会では3件の申込みがあり、相談1件ごとに相談員2名が担当した(写真13)。相談員が準備した回答や相談時間については、相談者にも満足していただけたと思っている。以前のようにブースを設置した当日受付での実施も検討したが、相談内容が事前に分かれば相談員の事前の準備ができ相談者にとっても有意義になると想定されること、相談内容



写真13 相談コーナーの様子

によってはその場での回答が難しいとの意見があったため実施を見送った。

相談員として、各支部から推薦と派遣をいただいた。大会当日お忙しいなか、相談員をご対応いただいた方々に深く感謝を申し上げる。

(小坂尚樹)

交流会

今大会は5年ぶりに交流会が開催され、会場定員の上限である150名にご参加いただいた。会場であるアルモニーピアノ(旧第一勧業銀行ビル)は、80年の歴史を誇り国の登録有形文化財に認定された歴史的な建物である。NHK大河ドラマ「真田丸」のメインテーマ曲が参加者を出迎え、開始時間前から多くの参加者が会場に集まり、賑わいのあるなかで交流会がスタートした。

始めに、佐々木博之実行委員長の挨拶、上叢義朋アイソトープ協会専務理事の挨拶の後、渡部浩司放射線安全取扱部会部会長の挨拶及び乾杯発声により歓談が開始された。料理は、地元食材を使用した12種類のオードブルと5種類のデザートが並び、地酒や地元産ワイン等10種類以上の飲み物が用意された。参加者は、グラスを片手に積極的に意見を交換し、久しぶりの対面交流に会話が弾んでいた。

交流会途中で、ポスター賞の表彰が行われ、多数の発表者の中から4名が表彰された。アトラクションでは、(一社)松本観光コンベンション協会の柏澤



写真14 交流会



写真15 実行委員、賛助委員集合写真

由紀一氏より、松本の歴史や文化についてご講演いただいた。大会会場である旧松本高等学校本館、講堂ホルの建物の特徴やあゆみについても紹介された。

交流会終盤に稲垣昌代近畿支部長及び近畿支部委員より、次年度の年次大会は滋賀県大津市で開催されるとの案内があり、滋賀県の観光PR動画等が紹介された。佐々木実行委員長より閉会の挨拶があり、最後に参加者全員で集合写真を撮り、2時間の交流会はあっという間に閉会となった(写真14)。特に印象に残ったことは、参加者が終始笑顔で交流を楽しんでいたことである。皆様のお力添えにより、交流会を円滑かつ成功裏に終えることができたことを心より感謝申し上げます。

(田辺恵美子)

主任者コーナーの編集は、放射線安全取扱部会広報専門委員会が担当しています。

【広報専門委員】

角山雄一(委員長)、井原智美、恵谷玲央、出路静彦、平木仁史、丸山百合子

入会のご案内

会員の特典

- Isotope News（広報誌）購読料無料
- RADIOISOTOPES（電子版）閲覧（無料）※1
- 出版物（当協会発行書籍）1割引
- 研修会・勉強会※2 受講料割引 など※3

※1 協会ホームページの会員専用ページ（マイページ）に2016年1月号から公開しています。

※2 一部の講習は除きます。

※3 そのほかの特典は当協会ホームページでご案内しています。

こんな方にお勧めします。

- アイソトープ・放射線を取り扱われる方
- 放射線安全管理に携わっている方
- アイソトープ利用・安全管理にご関心をお持ちの方
- 学生でアイソトープ・放射線に興味をお持ちの方

入会金及び会費（不課税）

	入会金	年会費
個人正会員	1,000円	4,000円
団体正会員	10,000円	27,000円
賛助会員	20,000円	81,000円
学生会員	なし	1,000円

申込方法はホームページでご案内しています。

👉 <https://www.jrias.or.jp>

問合せ：日本アイソトープ協会 会員窓口

E-mail : jria-post@as.bunken.co.jp

日本アイソトープ協会は、国民の皆様に安心してアイソトープをご利用いただけるよう供給から廃棄まで一貫した活動を展開しております。

協会の事業にご賛同いただき、一人でも多くの方のご入会を心よりお待ちしております。